ランチョンセミナー6　12月15日(日) 11:30～12:30　第2会場

共催：積水メディカル株式会社

夜間当直者と若手検査技師のための凝固検査の基礎知識 ～遭遇する可能性のある凝固検査異常値および間質性肺炎バイオマーカー(KL-6/SP-D)について～

五十嵐　恵介・須長　宏行
積水メディカル株式会社　国内営業部　東北営業所

『検査の始まりは採血である』と言われるように、採血手技や採血管の取扱いが正しくないと、正確な検査値を報告することはできない。特に、「採血直後の転倒混和」および「採血量の順守」が重要である。

真空採血管には目的毎に必要な薬剤(凝固促進剤または抗凝固剤など)が収容されており、転倒混和の不足や遅れおよび採血量の不足は、検査異常値を発生させる頻度を高める可能性があり、再採血の頻度を上昇させることになる。検査異常値に遭遇した場合、採血管、分析条件、前回値および関連項目等の確認が重要となる。誤った結果報告を防ぐためには、検査異常値の由来(病態、治療、分析系、採血・採血管取扱い)を迅速に識別できる能力が求められる。以上の基礎的な内容について分かりやすく説明する予定である。

さらに、汎用自動分析装置に搭載可能となった間質性肺炎バイオマーカー(KL-6およびSP-D(サーファクタントプロテイン-D))の検査キットについても紹介する予定である。